様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科研費
KAKENHI

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６年　５月２０日現在

機関番号：１６３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2023
課題番号：１９Ｋ０１０９７

研究課題名（和文）対馬暖流ベルト地帯周辺における縄文農耕の実証化に向けた関連石器類の広域基盤研究

研究課題名（英文）The basic study of the agricultural stone tools around the Tsushima warm current belt zone in Jomon period

研究代表者
幸泉　満夫（Koizumi, Mitsuo）

愛媛大学・法文学部・准教授

研究者番号：５０５９８８７８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：当該課題では途上、コロナ禍によって約２年半にわたる行動自粛を余儀なくされた。そのため、当初計画通りとなってはいない。けれどもアフターコロナを迎えた2021秋以降、関連機関への積極的な調査訪問によって大きく挽回し、1,038点にのぼる石器実測図、および11,200枚の画像収集に繋げた。2019年度からの課題期間内で論文15篇、単著４冊（うち市販１冊576頁、科研成果学術書３冊合計451頁）、共著１冊、講演会３回（各120分）の実績を収めた。これらの数々から、研究代表者が提起する「対馬暖流ベルト地帯」の輪郭と、初期農耕（原初農耕）に関わる特殊性の一端を明らかにすることができたといえるだろう。

研究成果の学術的意義や社会的意義
今回の研究成果により、わが国における初期農耕（原初農耕）関連具類の出現期に関する実態、対馬暖流ベルト地帯内における関連資料群の偏在傾向について、明確にすることができた。同地帯内の土器群に対する研究も進めたことで、対馬暖流ベルト地帯の輪郭と特殊性についても明らかにできた。成果を論文や著書のかたちで纏めただけでなく、対馬暖流に沿う各地の博物館での成果発表（講演会スタイル）により、学界、および市民一般に対して、広く公開を果たすことができた。本課題により見出された「対馬暖流ベルト地帯」は、先史時代におけるわが国への大陸文化導入の程度を改めて捉え直す転機へと繋がっていくことだろう。

研究成果の概要（英文）：In the course of the project, the corona disaster forced a two-and-a-half-year self-imposed suspension of activities. Therefore, the project has not been carried out as originally planned. However, since the fall of 2021, when the after-corona was welcomed, we have made a significant recovery by actively visiting related institutions and have been able to collect a total of 1,038 lithic measured drawings and 11,200 digital images. In addition, within the term of the assignment starting in FY2019, we have published 15 papers, 4 single-authored books (including 1 commercial book of 576 pages, and 3 academic books of scientific research results totaling 451 pages), co-authored 1 book, and delivered 3 lectures (120 minutes each). It can be said that, from these many results, we were able to clarify some of the contours of the "Tsushima Warm Current Belt Zone" proposed by the principal investigator and the peculiarities related to early agriculture (proto-farming).

研究分野：考古学/博物館学

キーワード：対馬暖流ベルト地帯　初期農耕　扁平打製土掘具　磨盤状石皿　磨棒状磨石　大陸系石刀　無文系土器分布圏　東日本縄文文化複合体西漸説への反駁

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　C－１９、F－１９－１、Z－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

「縄文農耕」をめぐる2000年代以降の進展、特に土器圧痕を前提とした「植物考古学」分野の研究成果は目覚ましい。事業開始直前の頃には、日本列島内における先史の有用植物等の実態が、急速に明らかにされてきた。

既に 100 年以上の関連学史が積み重ねられてきた日本の考古学界にとっても、快挙であったに違いない。けれども、その一方で関連する農具や関連遺構など、生業に関する実態解明は足踏み状態が続いていた。つまり、上記「植物考古学」分野における華々しい成果とは裏腹に、考古学的な摺り合わせ議論が未だ追い付いていなかったのである。

例えば「(粗)打製石斧」を中心とした縄文農耕石器群に対する学史的評価は、長らく中部・関東の縄文中期前後と、九州の縄文晩期前後を中心とした部分的な研究と評価に留まってきた。なかでも西日本周辺では1970年代以降、縄文時代後期における東日本からの伝播影響が半ば定説化していた。そうした固定的認識のもと、土器圧痕調査に基づくマメ類（ダイズ属、ダイズ亜属、アズキ属、アズキ亜属、ツルマメ）の分布が東日本側に偏重するという傾向とリンクさせることで、両者の伝播こそが西日本の実態である等と結論付ける研究者が後を絶たなかったのである。

しかしながら各地で多種多様に展開する土掘具の類はもとより、粗製の横刃型打製刃器類や擦切石器の一部、あるいは関連木器、骨角器等の存在を含めて、それら全てをマメ栽培と関連付けて解釈することは妥当とはいえなかった。そもそも園耕レベルのマメ栽培にどれほどの農具が必要だろう。単なるマメ類、現状で把握されているウリやシソ属の栽培、あるいは地下茎中心の天然食物、ないしは有用の根栽類系作物の採集のみにとどまらないであろう多様性と、未知の栽培活動が未だ潜在するという可能性も、今はまだ捨て去るべきではないのである。

研究代表者は日本海西部沿岸域における地道な調査を重ね、別途、縄文中期後葉以降で評価の少ない粗製土器群を新たな研究対象に「対馬暖流ベルト地帯」周辺で特に無文系土器が卓越する事実を主張しはじめていた。

以上の経緯から、本研究課題は、縄文農耕との関係が類推される石器類を中心に、土器や骨角器類の評価も加えつつ、「対馬暖流ベルト地帯」周辺を中心とした広域的な再検証を目的に、令和元（2019）年より研究活動を開始させたのである。

２．研究の目的

本研究は、今後の西日本で新たな展開が期待される初期農耕（原初農耕）関連資料群の解明を目指したものである。研究代表者が提唱する“対馬暖流ベルト地帯”を新基軸に、広域的な比較分析を実施し、再評価を進めるというものであった。

対象は対馬暖流ベルト地帯周辺の縄文早期前葉～弥生前期前葉までとし、合計57もの小期を設定したうえで検討を加えた。これまで各地で報告されてきた、未公開を含む既存資料を一件一件再調査し、使用痕観察と、製作技法の検証をもとに実測、器種の再認定を重ねていく。以上の作業を小地域、時期別に蓄積させていくことで、初の“対馬暖流ベルト地帯”を中心とした縄文農耕の実態解明につなげようというものであった。

“対馬暖流ベルト地帯”は、研究代表者が提唱しはじめたばかりの独創的な新視点であり、本課題の遂行によって、同ベルト地帯の存在意義を問うという、強い創造性が念頭にはあった。

３．研究の方法

関連資料の出土するベルト地帯周辺の諸遺跡のうち、特に今回、時期的な纏まりが高く、かつ一定の未公開資料が収蔵されている事例、公表図面等が古すぎたり、充分な展開図面が示されていない事例、あるいは、使用痕が図示されていない事例の再実測を念頭に調査対象を精査して、2019年７月から随時、資料調査を開始した。ところが事業開始のわずか半年後の2020年３月から深刻なコロナ禍にみまわれ、以降、約２年半もの厳しい行動自粛を余儀なくされたのである。このため、はやくから2021年秋に設定してあった福井県立若狭歴史博物館での中間成果発表を新基軸に、それまでは学内でも作業が進められる徹底した学史整理からの「成果学術書Ⅰ」発刊と、対馬暖流ベルト地帯内の土器評価に重点をおいた研究に切りかえながら、コロナ明けをうかがうことにしたのである。中間発表終了後も行動規制は続いたが、翌2022年度と2023年度の残された２年間ではなんとか、資料調査を再開できたため、最後の集中調査に断行し、以下の成果が示す通り、期間内での多くの成果発信に繋げることができた。

４．研究成果

当初からの最大の課題であった遺物実測にかんしては、最終的に 1,038 点にのぼる図面が完成、さらに11,200枚にも及ぶデジタル画像も収集することができた。またトータルで論文15篇、単著４冊（うち市販１冊576頁、科研成果学術書３冊、合計451頁)、共著１冊、講演会３回（各120分）という多大な実績を収めることができた。

なかでも「成果学術書Ⅰ～Ⅲ」（各Ａ４判並装）の発刊は、関連分野に対して広く貢献できた

と自負している。2021 年度発刊の「成果学術書Ⅰ」は、わが国における縄文学史を纏め、課題と展望を整理することで、コロナ禍のなか当該課題が進むべき課題と方向性を明示することができた。つづく 2023 年度発刊の「成果学術書Ⅱ」は、全５部、合計 31 の章で構成した。わが国における初期農耕導入初期の実態解明を前提に、関連学史の整理と分類基準の設定ののち縄文時代前半期（縄文早期～中期後葉）の農耕関連具、その他に関する実測図 507 点等を一挙公表した。主要成果は、次の 10 件である。① わが国における石製土掘具の登場が縄文早期後半にまで遡ること、② その起源地も従来の定説とは逆の西日本側に存すること、③ 中部・関東で縄文前期後半以降に盛行する石製土掘具は有柄掘棒ばかりであり、野生根栽類の集中採取が主目的であったと想定されること、④ 対する日本海西部沿岸の対馬暖流ベルト地帯側には少数ながらも多様な石製土掘具が存在したこと、⑤ 以上の石製土掘具の出現経緯として大陸（特に韓半島）側からの影響が看過できないこと、⑥ マイクロ土掘具（木製掘棒の石製刃先）の新発見、⑦ 列島内での大陸系石刀の初認識、⑧ 各地に潜在していた磨盤状石皿と磨棒状磨石の抽出、⑨ 鹿角斧の製作工程復元、⑩ 以上と連関した、未公開資料を含む合計 507 点に及ぶ実測図類の新規公開である。最後に刊行できた「成果学術書Ⅲ」は全５部、合計 24 の章で構成した。わが国の縄文時代後半期（縄文中期末～晩期末葉）における初期農耕（原初農耕）関連具類に対する実態解明を念頭に、関連学史の整理と、分類基準の整備を行ったうえで、本課題で作成してきた実測図 444 点等を一挙公開できた。主要成果は、次の 21 件である。① 西日本の縄文後半期における初期農耕関連具類の分布を時期別、器種別に明らかにできたこと、② 縄文中期末～後期前葉前半（J-Stage１～８）の西日本においては、関連石器群の分布が「対馬暖流ベルト地帯」にほぼ限定されること、③ 対馬および西北部九州本土～山陰地方周辺における大陸系関連石器の散在傾向、④ 各地に潜在していた磨盤状石皿と磨棒状磨石の抽出評価、⑤ 大陸系石刀の把握と「対馬暖流ベルト地帯」への偏在傾向（幸泉満夫 2022「대륙에서 유래한 석도 모양 석기 ―쓰시마 난류 벨트지대 주변 미지의 자르개류에 대한 예비적 고찰―」『愛媛大学法文学部論集 人文学編 』第 53 号も参照）、⑥ 西日本における有柄狭鍬（曲身系統および張出形土掘具）の偏在傾向、⑦ 京都府桑飼下遺跡出土の扁平打製石器 946 点に関する最新の個体数識別調査成果の公表、⑧ 東日本由来とみられる有柄掘棒群の西漸傾向、⑨ 瀬戸内周辺での扁平打製土掘具類の欠如と有抉刃器の盛行傾向、⑩ マイクロ土掘具（木製掘棒の石製刃先）存続の証明、⑪ 後期後半以降の西日本における打製石鎌の盛行、⑫「対馬暖流ベルト地帯」を源流とする有柄土掘具（鋤・鍬類）の薄手大型化傾向、⑬ いわゆる「擦切具」の多様性とその一部が除草収穫具を示唆する可能性、⑭「対馬暖流ベルト地帯」から北陸西部への伝播要素の抽出、⑮ 石製土掘具類の少数出土傾向に対する視座、⑯ いわゆる「土器圧痕レプリカ法」や「X線 CT 法」による有用植物検出事例の偏在性と土器、石器等の物質文化資料にみる「対馬暖流ベルト地帯」側との不一致性、⑰ 島根県五丁遺跡出土のイネ籾圧痕土器が縄文後期後葉～晩期前葉にまで遡る可能性の指摘、⑱ 岐阜県六里遺跡における韓半島系無文土器の発見、⑲ 畑（畠）作を基軸とした初期農耕の多様性に対する再認識、⑳ 石器使用痕研究に対する今後の発展的可能性、㉑ 以上の石製土掘具の分布経緯として大陸（特に韓半島）側からの影響が看過できないこと（西日本における「東日本縄文文化複合体」と「韓半島新石器・無文土器文化複合体」の相互影響による「文化複合」状態）。

これら成果の数々から、研究代表者が提起する「対馬暖流ベルト地帯」の輪郭に加え、わが国における初期農耕（原初農耕）の流入開始エリアや東日本への拡散過程、さらには縄文後半期における西日本での一連の動勢を学史的にもはじめて、明らかにすることができたのである。なかでも縄文前期前半以前の関連具類の抽出や、縄文後晩期へと至る磨盤・磨棒状石器、大陸系石刀の存在指摘、あるいは扁平打製土掘具類の多様性に関して、多くの指摘を行うことができた。

以上の成果に対しては、数多くの論文や著書出版に加え、対馬暖流に沿う各地の博物館（福岡県、山口県、福井県）での成果発表（講演会スタイル）を実施できたことで、関連学界のみならず、広く国民一般に対して、成果公開を果たすことができた。本課題により明らかとなった「対馬暖流ベルト地帯」の存在は、今後、わが国における先史時代の初期農耕問題に波紋を広げていくものと期待できよう。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計16件（うち査読付論文　7件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　11件）

１．著者名 幸泉満夫	４．巻 40
２．論文標題 四国地方	５．発行年 2023年
３．雑誌名 縄文時代の終焉	６．最初と最後の頁 55-58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 幸泉満夫	４．巻 令和３年度
２．論文標題 初期農耕開始期における未知の大形石製土掘具について	５．発行年 2022年
３．雑誌名 研究紀要　福井県立若狭歴史博物館	６．最初と最後の頁 1-6
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 幸泉満夫	４．巻 25
２．論文標題 四国地方における尖頭状礫器出現期をめぐる一考察	５．発行年 2022年
３．雑誌名 愛媛考古学	６．最初と最後の頁 53-68
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 幸泉満夫	４．巻 88
２．論文標題 岩田系土器群の研究	５．発行年 2023年
３．雑誌名 古文化談叢	６．最初と最後の頁 1-59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 幸泉満夫・髙木朋美・前田友香・畠中航志・菅百恵	4．巻 25
2．論文標題 四国地方における中津Ⅰ式土器成立期の一様相	5．発行年 2022年
3．雑誌名 愛媛考古学	6．最初と最後の頁 15-52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 幸泉満夫	4．巻 53
2．論文標題 （韓文）大陸由来の石刀様石器　－対馬暖流ベルト地帯 周辺における未知の刃器類に対する予備的考察－	5．発行年 2022年
3．雑誌名 法文学部論集　人文学編	6．最初と最後の頁 89-112
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 幸泉満夫	4．巻 25
2．論文標題 四国松山平野の初期農耕段階に伴う横刃型刃器類に対する認識	5．発行年 2023年
3．雑誌名 遺跡	6．最初と最後の頁 107-114
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 幸泉満夫	4．巻 25
2．論文標題 松山市大渕遺跡出土の脱穀・粉砕関連具	5．発行年 2023年
3．雑誌名 遺跡	6．最初と最後の頁 115-124
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 幸泉満夫	4．巻 51
2．論文標題 (朝鮮語)　韓半島東南部における新石器時代の無文様土器に関する研究	5．発行年 2021年
3．雑誌名 法文学部論集 人文学編	6．最初と最後の頁 53-96
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 幸泉満夫	4．巻 52
2．論文標題 (朝鮮語)　韓半島南部 新石器時代前期以前の農耕関連具出現期に関する研究	5．発行年 2022年
3．雑誌名 法文学部論集 人文学編	6．最初と最後の頁 89-130
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 幸泉満夫	4．巻 6
2．論文標題 近著紹介 縄文農耕論と関連考古学史	5．発行年 2022年
3．雑誌名 研究ニューズレター	6．最初と最後の頁 10-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 幸泉満夫	4．巻 II
2．論文標題 予稿集 対馬暖流ベルト地帯と縄文農耕関連具の出現	5．発行年 2021年
3．雑誌名 2021年度 科学研究費中間成果報告会資料（福井県立若狭歴史博物館記念講演会II予稿集）	6．最初と最後の頁 1-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 幸泉満夫	４．巻 84
２．論文標題 縄文文化解体期をめぐる土器資料群の研究２（後篇）	５．発行年 2020年
３．雑誌名 古文化談叢	６．最初と最後の頁 1-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 幸泉満夫	４．巻 85
２．論文標題 縄文文化解体期をめぐる土器資料群の研究３	５．発行年 2020年
３．雑誌名 古文化談叢	６．最初と最後の頁 1-66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 幸泉満夫	４．巻 83
２．論文標題 縄文文化解体期をめぐる土器資料群の研究２（前篇）	５．発行年 2019年
３．雑誌名 古文化談叢	６．最初と最後の頁 1－45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 幸泉満夫	４．巻 84
２．論文標題 縄文文化解体期をめぐる土器資料群の研究２（後篇）	５．発行年 2020年
３．雑誌名 古文化談叢	６．最初と最後の頁 1－31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　1件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 幸泉満夫
2．発表標題 対馬暖流ベルト地帯と縄文農耕関連具の出現
3．学会等名 鳥浜貝塚発見60周年記念特別展 森と出会った縄文人～人と植物の歴史の始まり～ 関連特別展記念講演会　福井県立若狭歴史博物館（招待講演）
4．発表年 2021年

〔図書〕　計1件

1．著者名 幸泉満夫	4．発行年 2021年
2．出版社 日本学術振興会科学研究費（基盤研究C）　成果学術書Ｉ	5．総ページ数 110
3．書名 縄文農耕論と関連考古学史　（一部、朝鮮語）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関